

# まったく怪しげな哲学入門

学力研 先生のための学校 校長 久保 齋

寒中お見舞い申し上げます。

本年もよろしく願います。

昨年はたくさんの授業を参観し、先生方にお話させて頂きました。そこで学んだことをもとに『予習で創る文学の授業（仮称）』を三月末に小学館より発売するのはこびとなりました。先生方の授業に役立てば幸いです。

長らく校長をしている学力研『先生のための学校』も今年で十一年目を迎えます。心新たに半年間しつかりと準備し九月の開講を迎えたいと思います。

正月は孫三姉妹に囲まれ穏やかに過ごしております。

ただ一つ気がかりなのは卓球の腕が上がりません。私の卓球は強い奴に一泡吹かせることのみが目的の喧嘩卓球ですが、五十肩？を患い、腕どころか肩

も上がらない始末です。先が思いやられます。

「読み書き計算」「二斉授業の技」「クラスづくり」は日本の教育が世界に誇る宝です。心地よい共同の教育を教室から、社会へ、世界へ発信しましょう。壁の向こうには必ず素晴らしい仲間と輝ける未来があります。憲法を守り、憲法の精神に則り凛として、一隅を照らす人でありたいと念じています。

二〇一七年 元旦

みなさんお元気ですか。これは私の年賀状です。岸本裕史先生が年賀状に細かな字でいろいろ書かれていたのを真似て、私もこのような年賀状を書くようになりました。一年に一度の機会だから、所信表明でもしたらと思つて書いています。それに汚い字

で一言添えています。印刷だけの年賀状はとてもさみしいものです。やはり一言はほしいなと思います。

さて、本がようやく出来上がります。大騒ぎをして、これかようと思わないでください。私の力、精一杯の本です。先生方に文学の授業のためのよい参考書を提供したいと考えて、企画し始めましたが、大きな壁がありました。それは教科書の文面はただでは使えないということでした。要するに著作権の壁があつたのです。それはとても大きな壁でした。これを何とかクリアしてようやく出版にこぎつたのです。

他の参考書には絶対に負けない自信があります。次の広場で宣伝しますので、ぜひ、本屋さんで買ってください。ホンカラキンコン（これPCのことです）で買って書評を送ってください。

私はこの本で、予習での教育改革を訴えています。それに文学の授業を文学の授業として確立させる今日的意義、そして、国語を国語科として確立させる意義を取り上げています。もちろん、現場教師が国語に自信をもって取り組めるようにその方法論

も満載しています。読んだ教師が自分の本棚にいつまでも置いておいて、毎年文学教材を教える時に取り出して参考にしてくださることを念じて書きました。よろしくご活用ください。

### 有田先生の話

昨年有田先生がお亡くなりになりました。僕は有田先生のお話を若い時に一度お聞きし、学力研の集会で一度対談させて頂いただけ、たった二回しかお目にかかったことの無い先生でした。本の一冊も読んだことのない私ですが、なぜか心に深く刻まれる大先生との出会いでした。

それがなぜなのかをこのごろ考えています。有田先生は社会科を主にお話されました。日本中にはすごい人数の有田先生信奉者がおられるのです。

私はその理由を次のように考えています。私が聞いたお話は地図の記号の話(村・町・市)でした。もう三〇年も前の話で内容も定かではありません。でもすごく社会科を子どもたちと勉強したくなったのを覚えています。僕はその時、六年の担任だったから、先生のお話になった内容は授業では直

接役に立たないはずなのに、有田先生のように子どもたちと社会科をやりたいとおもったのです。先生のお話はハウツーではない。社会科そのものの、子どもたちと授業をつくりたい。もっと深く教材研究がしたい。

有田先生のお話は、そう思わざるを得ないようなすごい内容のお話だったので。

深沢先生と有田先生の話をしたとき、僕はこう思ったのです。

『もし、僕が「モチモチの木」を題材にして話すとしたときに、参加者が三年生の担任だけだったら、僕はハウツー人間だと思おう。もし、僕が「モチモチの木」を題材にしても、久保先生の国語を聞きたかったのと人が集まってくれたら、僕は国語をちょつとは話せる人間になったのだ。一隅を照らせる人になったのだと思う。』

『聞く人のために、1年から6年までの文学教材の講座を用意するのは止めよう。それは聞く人へのサービスではあるかも知れないが、話す側の聞く側への迎合であるし、侮辱でもあるのではないのか。僕が聞く人の聞く能力と探究心を信じているならば、「モチモチの木」を題材にしてもその人は

「海の命」を教えることにワクワクして家路につくはずだ。そんな話し手を自分ほめざそう。そんな聞き手に迎合しない態度こそが、真の聞き手を、実践家を育てるのではないかと考えるのです。』

『大人に話すときも、子どもに話すときも、半分分かって、半分分らない方がよいのです。そんな話の方が、全部分かる話よりもはるかに値打ちがあるのです。これこそ今流行のアクティブラーニングを仕掛ける話し方であるし、人の心に探究の種を蒔く話し方なのです』

『僕が金閣小学校で全国公開授業で社会科の地域教材で《原谷》を取り上げたのも、有田先生の影響であり、社会科の地域教材の発掘に情熱を燃やしていた仲間の先生の存在が大きかったのです。有田先生のDNAが僕の教師魂の中に息づいていたのです。今、僕たちが成すべきことは、催しの形や量に一喜一憂することではなく、たった一人の聴衆であろうとも、教育へのロマンを、迸る情熱を、落ち研、学力研の魂を、DNAを、誠意を込めて、丁寧を受け渡すことではないでしょうか。』